

チーム市町校長会・チーム県連小に向けて

第六十回広島県連合小学校長会

教育研究大会東部大会を終えて

東部大会現地実行委員長 **横松和義**



第六十回広島県連合小学校長会教育研究大会東部大会を、風光明媚な景観と歴史・文化などの街である尾道市で開催しました。

本大会は、五年ぶりの全員参集、分科会実施のフルモード開催、しかも尾道市での開催は十一年ぶりというところで、開催運営の見通しが立たず、とても不安な気持ちでいっぱいでした。しかし、尾道市小学校長会の衛藤会長を中心に、尾道市開催に向けた前向きな意見が多く出され、尾道市校長会のメンバー全員で力を合わせて開催に向けた準備を進めていくことになりました。このように、前向きに開催を考えることができたのは、尾道市の教育を適正に進めていくために、常に連携を行ってきた尾道市校長会がチームとして機能していたからだと思います。

尾道市で開催するにあたり、まず検討をしたのが会場です。当初は、二つの会場での開催を考えましたが、尾道市にお越しになる校長先生方のご負担をできるだけ少なくするために、ホールと十の分科会が開催可能な部屋があり、近くに駐車場がある会場を検討

することにしました。現地に行つて検討を繰り返す中で、尾道市民センターむかいしまを会場とすることにしました。会場決定後には、尾道市の校長一人一人が役割を持ち、会議を重ねて当日を迎えることとなりました。

大会当日は、とてもお忙しい中にも関わらず、お越しいただきました、広島県教育委員会教育長篠田智志様、尾道市教育委員会教育長宮本佳宏様からご祝辞をいただきました。また記念講演においては、株式会社フジテレビジョン局長兼ゼネラルアナウンサーの西山喜久恵様から、「自ら未来を拓く子供の育成」学校に期待すること、「先生は、どれだけ子供を待てますか？」という演題で、教育者として必要な心構えなどのお話を伺うことができました。そして、五つの領域で構成される十の分科会においては、テーマごとに各地区の校長先生方から貴重な実践が提案され、助言者の先生方の丁寧なご指導のもと、充実した分科会になりました。

本大会の参加率も比較的高く、尾道市校長会のメンバーは、やり切ったと

いう達成感を味わうと共に、より一層強い絆で結ばれ、より強いチーム尾道市校長会になったと感じます。

本大会に向け、県連小事務局の芳川事務局長には、来賓への事前依頼をはじめ、多くの面で細やかなご助言・指示をいただきました。また、分科会の運営などで、ご尽力いただいた花田委員長をはじめ教育研究委員会の皆様に、衷心よりお礼申し上げます。

令和七年度は、庄原市で本大会が開催されます。開催準備などを通して、チーム庄原市校長会がより強い絆で結ばれることを願います。そして、また再び、同じ課題や喜びを知る多くの仲間が集い、共に実践を交流する中で、校長としての資質・能力を高めると共に、本大会を充実させていきたいと思います。本大会の充実には、チームとしての県連小の強さになります。チーム県連小として、広島県の全ての子供たちを健やかに育ててまいります。

最後になりましたが、本大会に際しまして、格別なご指導、ご支援をいただきました広島県教育委員会、広島市教育委員会、尾道市教育委員会並びに福山市教育委員会、とても暑い中、駐車場を担当してくださった三原市校長会の皆様、県連小会長の山田幸治様や事務局をはじめとする関係者の皆様に深く感謝申し上げます。大会を終えての挨拶とさせていただきます。

(尾道市立栗原小学校)

第六十回広島県連合小学校長会

教育研究大会東部大会

一 研究主題

自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進
 〈夢や志をもち他者と協働して主体的に新たな価値を創り出す子どもを育成する学校経営〉

二 期日

令和六年八月二十三日(金)

三 会場

むかいしま文化ホール
 向島公民館

四 日程など

- 1 開会行事
- 2 講演 演

〔講師〕

西山 喜久恵 氏

フジテレビアナウンサー兼
 ゼネラルアナウンサー

〔演題〕

自ら未来を拓く子供の育成
 〈学校に期待すること〉
 「先生は、どれだけ子供を待てますか？」

- 3 分科会
- 4 閉会行事

学校経営

「自立した学習者の育成を目指して」

授業観のアップデート

竹原市立竹原小学校長 吉田美和

一 はじめに

本校は、竹原市のほぼ中央に位置する全校児童百七十名の小学校である。予測困難な変化の激しい時代の中で、学校は、多様な他者と協働し主体的に生きていく児童を育成することが求められている。自立した学習者を育てるためには、まず、授業観をアップデートすることが必要であると考える。一斉指導も効果的に行いつつ、今の時代に合った学びの場を作っていく。国語科を中心に授業改善に取り組んでいるところである。

二 授業観のアップデート

本校では昨年度まで、育成したい資質・能力や目指す児童像を全職員で共有する取組を行ってきた。本年度は、目指す授業像をアップデートして共有するための研修を行った。

年度初めに校長から外部講師に研修の趣旨をお伝えした上で御指導をお願いし、五月に研究主任が授業提案を行った。学習意欲を高める導入、自力解決とペアでの活動、揺さぶり発問に対する堂々とした児童の説明など、従来の研究授業で見てきたような「よい授業」であった。この授業に対して、外

部講師から「先生がいなくても自力で読む力をつけているか」などの厳しい御指摘をいただいた。職員への配慮が必要な場合もあるが、授業観の転換を意図して率直な御指導をお願いした。

この授業研究をきっかけに、研究企画部で根本的な研究の見直しが始まった。これまで当然だと思っていた学習規律や発問の工夫、授業モデルなどを一旦手放し、児童が自分で学んでいくにはどうすればよいかに焦点を絞って検討していった。通常では年度途中に研究主題を変えることはあまりないが、職員が納得して進められるよう柔軟に対応した。校長は、参考になる書籍を手渡したり、研修日以外でも相談に応じたりして協議を繰り返し、新たな研究構想ができ上がった。

三 目指す授業像の共有

一学期末に、研究主任が校内研修で新たな研究主題「授業観のアップデート！自立した学習者を育てる授業づくり」と研究の構想について説明した。その研修で、校長が授業観察で見付けた児童の望ましい姿を写真で紹介した。写真を見せながら「この子は自分で掲

示物を見に行つてヒントを見付けていた。」など、児童が何を考えていたのかを説明した。教師の教えを待つ受け身の姿ではなく、一人一人が自分なりの方法で動けるような姿を目指したい、そのような具体的な授業像を共有することができた。

目指す児童の姿が見られた授業の交流も、毎週金曜日「授業ミーティング」で継続的に行っている。また、授業で目指す姿を児童とも共有するため、研究企画部で下のような掲示物を作成し、各教室に掲示している。



四 働き方改革時代の授業改善

授業改善と働き方改革を並行して進めるため、研修も効率よく効果的に行わなくてはならない。本校では「簡単掃除」の曜日 に 時程を繰り上げ、暮会や研修の時間を確保している。全教員が年間一回は学習指導案を作成し、目指す授業像に向かって実践を行う。この授業研究とは別に、日常的な授業改善のため、毎週金曜日に「授業ミーティング」を行っている。事前に担当者がテーマを周知し、各自が1か月の間に実践する。資料作成に時間をかけず、ミーティングの始めにGoogleスライドに全員が写真を貼り付け、口頭で説明する。このミーティングがある

こと自体が、テーマを意識して実践を行うモチベーションにつながっている。また、ICTの活用事例の交流も行っている。

個別最適な学びと協働的な学び、業務改善の視点からも、ICTは重要なツールである。アップデートした授業観



では、一人一台端末を教師の指示で一斉に使うのではなく、児童が必要な時に使いこなせるようにしていきたいと考えている。教師自身も、教材の作成や形成的評価、授業研究のグループ協議などで、積極的に端末を活用している。

五 終わりに

学級全体で一斉に同じように進める画一的な授業には限界がきていることは、教師の誰もが認めることであろう。本校はSSR推進校としても、多様性に対応した個別最適な学びを模索しているところである。授業観のアップデートには様々なアプローチが考えられるが、従来の当たり前を問い直すことが必要であった。そのきっかけを作ってくださった外部講師の先生に心から感謝申し上げたい。

(竹原市立竹原小学校)

学校経営

「進んで学び ともに伸びる」

「自主・協力・創造」
自ら考え判断し行動する子供の育成

三次市立八次小学校長 赤木 実

一 はじめに

本校は、明治七（一八七四）年に開校し、今年度で創立一五〇周年を迎える。秋には、PTA主催で各種記念事業が行われる。その一環として、秋には本校卒業生のシンガーを招聘して、記念講演と子供たちから「八次地域、小学校の良いところ」を募り、歌をつくってもらう予定である。子供たちは、「どんな歌になるだろう」と今からワクワクしている。

二 校訓

本校の校訓は、子供たちの成長への願いを込めて、この地の名「やつぎ」の文字から、次の通り定められている。
○「やろう(行)」―自主
自主的に健全な生活を営む人になろう
○「つろう(連)」―協力
真に協力的な人になろう
○「きろう(鑽)」―創造
問題を創造的に解決する人になろう

この伝統ある校訓を大切にし、子供

「自主・協力・創造」

自ら考え判断し行動する子供の育成

三次市立八次小学校長 赤木 実

たちにとって「ワクワクしながら自ら学ぶことができる」学校、「友だちと協力しながらいろいろなことに挑戦することが楽しい」学校、「学んだことを生かして新たなこと(もの)を創造する」学校となるよう取組を進めている。

三 自律した子どもの育成

本校の学校教育目標は、校訓を基に「進んで学び ともに伸びる―自主・協力・創造―」と定め、目指す子供像を「自ら考え 判断し 行動する子供」とし、自律した子供の育成を目指している。

一〇年後の社会は予測することが難しいとよく言われる。一〇年後とは、今の小学六年生が社会に出ている頃であり、そんなに遠い未来ではない。変化の激しい社会の中で、子供たちが「なりたい自分」になるために生きて働く力が「自律する力」であると考える。

このことは年度当初教職員全員で確認し、キャッチフレーズを「信じて任せて ほめて 伸びる」として、取り組んでいる。子供の力を信じて、子

供に任せて取り組ませ、子供ががんばっているところをしっかりほめて、そして子供が伸びて輝く八次小学校にしていこうと、学習の場だけでなく行事等いろいろな場において、全ての子供に「自分で考え、判断し、行動(解決)する力」を付けていくように意識して指導している。

四 地域とともにある学校

本校では、校区にある八次中学校と共に「八次コミュニティ・スクール」の取組を進めている。保護者や地域の方に学校運営協議員になっていただき、「やつぎを愛し、自律と貢献の志」をもった次世代のやつぎ地域の担い手となる児童生徒と一緒に育てている。

これまでコミュニティ・スクールをどのように進めていくか、学校運営協議員と教職員とで熟議を行ったり、中学校では面談等の練習の際に力をお借りして一緒に行ったりしてきた。本年度は、「学びの応援団」として、学校運営協議員や多くの地域の方が子供たちの学びを支えてくださっている。本校では、農作業やミシンの扱い方を教えていただいている。子供たちは「とても分かりやすかった」と満足し、地域の方も「子どもと一緒に学習できて、元気をもらった」と喜ばれていた。また、第六学年の子供たちは、音楽発表会へ向け、地域の伝統ある鼓踊り「ど

んちゃん」を地域の方に教えてもらい張り切って練習している。

子供たちが大人になっても「ふるさと八次」を応援し続けてくれるよう、これからも地域とともに子供たちの成長を見守っていききたい。



五 みよし結芽人育成研修

三次市では、本年度から毎月一回程度、全小中学校の教職員が集まり「みよし結芽人育成研修」を行っている。

この研修は、指導方法・学校管理運営等の改善・充実を図り、児童生徒一人一人に確かな学力を身に付けることを目的としている。小学校では、主に算数科の理論研修や授業研究を行っている。小規模の学校が多い中、同学年の教諭が集い研究を深めることができ、大変有意義な研修となっている。

六 おわりに

子供たちは、それぞれ違った良いところを持っていて、みな自分の人生の中では主役であり、そして、将来の三次市を担うかけがえのない宝である。子供たち一人一人が、笑顔でキラリと輝く学校にしていきたい。



得意・苦手は見方したい

すべての経験に価値がある

理事 上本 真理

わたしが小学生だった頃、学校にはプールがなく、水泳の学習はなかったのですが、夏休みに水泳記録会がありました。記録会に参加するのは四年生以上です。先生や保護者と一緒に船で沖美町の無人島に行き、海で記録会をします。海中でお父さん達が、百mのロープを岸に平行になるように持って立っていて、そのロープに沿って泳ぎます。百mのロープですから、行つて帰つて二百m。それを五往復して、千m泳ぐ記録会です。四年生から六年生まで経験を積んだおかげで、毎年、「千m記録証」をもらいました。

わたしは、「泳ぎに自信があるか」と聞かれたら何と答えようか迷います。競争したら、スピードは出ないし、なかなか前に進みません。でも、カエル泳ぎをしたり、体の向きを変えて横泳ぎをしたり、上を向いて泳いだりしながら、息をついで長い時間浮いて進むことはできます。だから、泳ぐのが苦手なわけではありません。海に落ちたとき、自分の命を守る力はあると思っています。これって、「自信がある」と

と言つてもよいでしょうか？

わたしの泳ぎは、競争という観点から見たら苦手かもしれないが、違う観点から見たら得意だとも言えますよね。物事の見方は一つではありません。皆さんも、得意なこと、苦手なことがあるでしょうが、学校の勉強や家での生活、関わりのあるすべてのことには、全部、価値があります。無駄なことは一つもありません。そして、今、がんばっていることが、今後どのように役に立つのかは分かりません。だから、たくさんの方にチャレンジして、多くの経験を積んでほしいと思います。(江田島市立中町小学校)

「先輩から学ぼう」

会員 豊田 浩矢

今日は皆さんに、小学校の先生になるために、教育実習生として高須小学校に来てくれている二人の先輩を紹介します。

実は校長先生は、二人のことは十年前から知っています。それは十年前、校長先生が高須小学校の教頭先生をしていた時に、二人は五年生だったからです。二人とも今は校長先生よりもずっと大きくなり、そして、小学校の先生を目指してくれていることを大変うれしく思っています。

校長先生は皆さんに話をする前に二人から話を聞く機会があり、その中で皆さんに是非伝えたいと思つたことがあります。それは夢を見つづけるため

のヒントです。

まずAさんが小学校の先生になろうと思つたきっかけは、当時の担任の先生のこと大好きで、「あの先生のようになりたい」という憧れの気持ちを持つたからだそうです。

次にBさんは、小さい頃から「人と関わるのが好き」だったそうです。この自分の好きなことや得意なことを考えていった先に、たくさんの人と関わる事ができる学校の先生になるという夢が見つかったそうです。

校長先生は二人の話を聞いて、夢や目標を持つためには、なりたい自分を想像して「憧れる」気持ちを持つことと、「好きなことや得意なこと」にこだわる「ことが大切だと思つた。夢の実現のために頑張っている二人の先輩からとても大切なことを教えてもらったと思つています。

皆さんも夢を見つけ、その実現に向けて頑張つていきましょう。(尾道市立高須小学校)

原爆の日、平和への願い

会員 正田 政則

今から四年前のことです。地域の八十六歳のおじいさんが、私を訪ねて来られました。そのおじいさんは「話したいことがある」と私が書いた学校だよりを持っておられました。

学校だよりには、「川根の地こっそのびてたつくしんぼ」と新聞に載つたことも俳句とその俳句を見つけたある人が学校あてに送られた手紙の一部

を紹介していました。「私は戦争中、川根に疎開し、小学五年生まで川根小学校に通いました。今は遠く離れて暮らしていますが、新聞の俳句『川根の地』という言葉を見て、とてもなつかしく、七十年以上前の川根を思い出し、思わず手紙を出しました。(略)」

それから、おじいさんは次のような話をされました。「当時、地域のお寺に広島から疎開して来た子供がたくさんおつた。八月六日、広島に原爆が落とされ、お父さんやお母さんが亡くなったことを先生から知らされて校舎の裏で皆で泣いとつた。かわいそうで見とられんかった。わしが六年生の時…。わしも年をとつたのかも知れんが、その人に会いたい気がするで。」地域のおじいさんも、小学生の時、疎開された方も、今では九十歳を超えておられます。

戦争中、小さな子供たちが田舎に集団移住していたのが学童疎開です。学校の歴史を調べてみると、「広島市〇〇国民学校集団疎開学童入校式」と書かれてあり、毎日食料確保のため、児童が畑作業をしている写真もありました。

今日は広島原爆の日。戦争や原爆の恐ろしさを知り、その時代のことを皆で考え、悲しい出来事が二度と繰り返されないように願います。自分の隣の人と対話し、自分の意見が言えて、友達の話や聞き、このことを一人一人が大切にする高宮小学校にしましょう。

(安芸高田市立高宮小学校)

委り 教よ 県だ

心理的安全性のある職場づくりのために

広島県教育委員会事務局
教職員課長

藤井典之

今年度から、管理職の人事評価に「心理的安全性」の要素を取り入れた。具体的には、校長の評価項目に、「教職員が発言・行動しやすい組織風土を創り出すこと」が加わった。

さて、校長先生方には、心理的安全性のある職場づくりのために、具体的にどのようなことが求められるのか。

石井遼介氏はその著書の中で、日本の組織では、話しやすさ、助け合い、挑戦、新奇歓迎の四つの因子がある時、心理的安全性が感じられると述べている。

「話しやすさ」の因子は、最も重要かつ、他の三つの心理的安全性の土台となるもの。

知らないことや分からないことがある時に、そのことを自然体で尋ねることができると学校ですか。

報告がネガティブなものであっても、事実が事実として上がってくる学校ですか。

「助け合い」の因子は、トラブルに迅速、確実に対処、対応する時や、通常より高い教育目標を達成する時に重要な因子となる。

・問題が生じた時、人を責めるのではなく、建設的に解決策を考える雰囲気がありますか。

「挑戦」の因子は、組織に活気を与え、時代や社会の変化に合わせて、新しいことを模索し、変えるべきことを変えるために重要な因子である。
・面白いアイデアを思いついたら、みんな

随想

『ありがとうの花』の咲く学校に

副会長 簀戸浩之

校長になって転任する先々で子供たちに必ず言い続けていることがある。それは『ありがとう』を一日十回言いましよう。そして、「魔法のことばです。」と添える。

自分を支えてくれる全ての人（家族、周囲の人々）への感謝の気持ちを大切にしたいと思う。まずは、いつも元気な笑顔を見せてくれる子供たちに感謝したい。これが校長にとって唯一無二のエネルギーだ。

ある日、近所のおばあさんがこのことを新聞に投稿され、記事を見せに来てくださった。おばあさんは元教員。

んなで共有してみよう、やってみようと思える学校ですか。

「新奇歓迎」の因子は、この正解のない時代にあつて、メンバー一人一人がポトムアップに才能を輝かせ、多様な観点から社会の変化を捉えて対応する際に重要である。

・役割に応じた、強みや個性を發揮することを歓迎されていると感じる学校ですか。

ぜひ、校長先生方には、学校に心理的安全性をもたらす心理的柔軟なリーダーを目指していただきたい。

通りがかりの子供たちに「今の校長先生はどんなことを言っているのか」と尋ねられ、共感してくださったのと。子供たちがこの話をしてくれたことは嬉しかった。転任する際には、坂田おさむさんの『ありがとうの花』を歌ってくれた。

ウェルビーイングが注目されている。我々教職員が、子供たちの幸福感を改めて意識しなければならぬのだらう。情報化の進展、人のつながりの希薄化の進む中、これも学校教育の役割として重みを増しているのか。その基盤は、教室に「ありがとう」があふれる学級

経営ではないか。校長の職にあると楽しいばかりではない。悲しいこと、申し訳ないこと、自分の力不足が情けなくなる。そんな自分でも多くの人に支えられて校長職を何とか全うできている。

今日もつつむき加減に登校し、それでも頑張る子供たちがいる。指導者の立場で肯定評価するのも悪くはないが、私は、よく頑張ってくれて「ありがとう」と感謝したい。

(福山市立瀬戸小学校)

あとがき

今年度の総会・研究大会並びに教育研究大会が五年ぶりに全員参加での開催となりました。

また、各学校におかれてもこれまで縮小・中止してきた学校行事や地域行事等が復活し、これまでのやり方を見直されたり改善されたりしながら実施されてきたことと思います。働き方改革もさらに進めなければならぬ中で、学校の経営は、校長先生方にとって大変なご苦労・ご心労があつたことと思います。そのような中で、会報一九五号が発行できましたことは、ひとえに皆様方のおかげと感謝しております。県連小広報活動が、少しでも皆様の学校経営の一助となれば幸いです。発行に関わってご尽力いただきました皆様に感謝申し上げます。